

片瀬山古墳群調査報告書
後田遺跡発掘調査報告書

2 0 0 3

清水市教育委員会

片瀬山古墳群調査報告書

後田遺跡発掘調査報告書

2 0 0 3

清水市教育委員会

序 文

我が国屈指の名勝である日本平に人々が営みをはじめたのは、今から約1万7千年前の旧石器時代であると考えられています。そして、日本平を形成する有度丘陵とその周辺部には、天王山遺跡や西の原古墳群をはじめとする、多くの遺跡が存在しています。

このたび、有度丘陵の北麓、馬走北の片瀬山古墳群と、東麓の日立町に所在する後田遺跡の調査を実施いたしました。本書はその調査の成果を報告するものであります。

片瀬山古墳群では、古墳の位置と出土遺物を確認することができました。また、後田遺跡では平安時代と考えられる溝状の遺構を検出いたしました。これらは、本市の古代史を解明するうえで、貴重な発見であると思われます。

本書が多くの皆様のご供覧を賜り、学術研究のみならず、わが郷土「しみず」を再認識していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご理解とご協力を賜りました皆様に、心よりお礼申し上げます。

平成15年1月

清水市教育委員会
教育長 赤羽 勝雄

例 言

1. 本報告書は清水市教育委員会が埋蔵文化財保存事業として行った片瀬山古墳群の調査と後田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 片瀬山古墳群の調査は杉山 満が行い、後田遺跡の発掘調査は杉山満の指導で大川敬夫が実施した。
3. 調査の整理作業については、杉山 大川が大村明子 片瀬志穂の協力を得て実施した。
4. 本書の執筆は杉山 大川が分担して行った。各執筆分担は次のとおりである。

片瀬山古墳群調査報告書

1. 位置と立地 2. 経過 4. まとめ 杉山 満

3. 遺物 大川敬夫

後田遺跡発掘調査報告書 大川敬夫

5. 片瀬山古墳群の調査・後田遺跡発掘調査にあたっては遺物所有者である伊藤英明氏と井上光明氏をはじめ関係各位の文化財保護に対する理解とご協力に感謝します。
6. 後田遺跡の出土遺物については川合修氏の指導を得ました。
7. 後田遺跡発掘調査の発掘調査の資料はすべて清水市教育委員会が保管している。
8. 本書に関する事務はすべて清水市教育委員会が行った。

目 次

序 文 例 言 目 次

片瀬山古墳群調査報告書

目 次

1. 位置と立地	1
2. 経 過	2
3. 遺 物	3
4. ま と め	6

指図目次

第1図 片瀬山古墳群位置図	1
第2図 片瀬山古墳群周辺図	2
第3図 片瀬山古墳群出土土器実測図(1)	4
第4図 片瀬山古墳群出土土器実測図(2)	5
第5図 片瀬山古墳群出土土器実測図(3)	6

後田遺跡発掘調査報告書

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 環 境	1
3. 調査の概要	4
4. 遺 構	4
5. 出土遺物	6
6. ま と め	8

指図目次

第1図 後田遺跡位置図	1
第2図 後田遺跡調査区配置図	2
第3図 後田遺跡土層図	3
第4図 後田遺跡遺構全体図	5
第5図 後田遺跡出土土器実測図	7
第6図 後田遺跡出土石製品実測図	8

図版目次

図版第1 片瀬山古墳群

1. 片瀬山遠景
2. 片瀬山1号墳
3. 片瀬山2号墳

図版第2 片瀬山古墳群

1. 1号墳出土土師器環
2. 1号墳出土大型埴
3. 1号墳出土埴
4. 1号墳出土脚付短頸壺
5. 1号墳出土提瓶
6. 1号墳出土提瓶

図版第3 片瀬山古墳群

1. 2号墳出土提瓶
2. 2号墳出土大口壺
3. 3号墳出土長頸壺

図版第4 後田遺跡

1. 調査区近景
2. 溝完掘状態（西から）
3. 溝完掘状態（東から）

図版第5 後田遺跡

1. 段皿（表）
2. 段皿（裏）
3. 石製品
4. 砥石

片瀬山古墳群調査報告書

1. 位置と環境

今回の遺跡調査において、新たに片瀬山古墳群が確認された。その所在地は、有度丘陵東北部の最先端、ちょうど有度山東麓と北麓が折り合う地点に当たるが、北方の平野に突き出た低丘陵、通称片瀬山の南端西斜面に位置する。片瀬山は稜線がほぼ南北方向に走り約300m、東西約100mの小丘陵で稜線上の北側に標高56.1mを示す三角点が存在する。周辺低地との比高は約25m前後である。丘陵南端は馬走地区と今泉地区を結ぶ古道が通ずる小規模な切通しを隔てて、楞嚴院周辺の瓦ケ谷丘陵に連なる。

丘陵東裾部には延命山誓願寺があり、寺の南側斜面は稜線付近まで墓地となっている。稜線上には3つの瘤状の尾根が存在したが、墓地上位の南端の尾根はほぼ平坦に削平されている。残存する北側の2つの尾根は、外見上では確認できないが、規模や形態からみて古墳の可能性もあり得る。

当古墳群確認のきっかけとなった片瀬山1号墳は、南端尾根の西方10数mの傾斜面に立地し、標高42m前後の地点である。この斜面は四方沢川の開析谷に形成されている馬走集落に面している。

追跡調査の経過で新たに確認された2号墳と3号墳は1号墳の南方約100mの地点に存在した。片瀬山と瓦ケ谷丘陵との間には、宅地造成以前、西北方向に突起状に伸びる小丘陵があり、両古墳ともその稜線上に立地していた。現在は地形が大きく変化し古墳も完全に消滅している。

当該古墳群周辺の遺跡としては、南東200mの地点には瓦ケ谷窯跡、4～500mには古墳時代の今泉Ⅰ・Ⅱ遺跡、南方約300mには馬走横穴、約400mには馬走古墳群等の存在が確認されている。



1 : 25000

第1図 片瀬山古墳群位置図

2. 経 過

平成10年、清水市内の考古学同好者で組織する鑑の会のメンバー望月清仁氏 から佐藤秀作氏に「有東坂の誓願寺裏山から出土した3個の須恵器を誓願寺が所蔵している」との情報が伝えられた。有東坂に住む佐藤氏は早速同寺を訪ね、住職の伊藤英明氏からその経緯について説明を願った。住職の話によると、「平成9年春頃、裏山（片瀬山）の南西斜面の宅地造成が基地上方の尾根付近まで進行した段階で、開発業者の清水土木株式会社から寺所有地の尾根一帯も同時に整地しないかとの相談があったので工事を依頼した。その際、数個の土器が出土し、そのうち3個を記念として工事関係者から頂戴した」との説明であったという。その後、佐藤氏は出土地点を地図上に記し、須恵器の写真を添えてこの情報を清水市教育委員会の大川敬夫に報告した。

平成12年、大川敬夫と清水市埋蔵文化財調査事務所嘱託杉山 満が、有度山北麓出土の未報告考古資料を収集する作業の一環として改めて現地調査を実施した。この折り、伊藤住職より工事責任者も土器を所持していることを耳にした。

本年、報告書を刊行する機会を得たので、その工事責任者である井上光明氏（清水市大坪町2-11-1在住）を訪問し、出土地点、出土状況等について尋ね、所蔵する土器の実測、撮影をした。土器に記載されたメモにより分類すると1987年今泉出土の長頸壺、平成4年出土の短頸壺と提瓶、平成9年出土



1 : 25000

第2図 片瀬山古墳群周辺図

の台付壺、提瓶と土師器の碗の三種が認められた。誓願寺所蔵の須恵器は平成9年の出土時と一括のものであることが判明した。これらの土器は昭和末年から平成9年にかけて清水土木株式会社が実施した片瀬山南西麓の宅地造成工事によって出土した遺物であった。前半期は馬走から今泉に通ずる古道の南側に存在した突起状の小丘陵を削平し整地した工事であり、この際、現在の鈴木剛宅(清水市馬走445-1、敷地の大半は今泉80-8、12)屋敷内付近で長頸壺が出土した。その西側の隣接地、エステートピア九重(清水市馬走445-4)駐車場付近で短頸壺と提瓶が出土した。石室の存在については今泉地点では石が出土したように思うが、馬走地点は全く記憶にないという。平成9年の工事は片瀬山南西麓斜面中位から尾根までの宅地造成と整地であったが、この工事で現在の斉藤正巳宅(清水市馬走北3-37)敷地内から大量の石が露出し、その石の間から数個の土器が出土したという。この状況から判断して明らかに古墳であったことが推察される。石材は一括して業者に渡したといわれ、現状には1個の石も存在していない。

3. 遺 物

片瀬山1号墳からは土師器の坏、須恵器の大型碌、碌、脚付短頸壺、提瓶2個の計6個が出土した。(第3図・第4図6) また2号墳からは提瓶、広口壺の2個が(第4図7・第5図8)、3号墳からは長頸壺1個が出土した。(第5図9)

土師器の坏(第3図1)

坏身で口径13.2cm 器高4.8cm前後を測る。底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。外面はかなりマメツているが、内面には放射状の暗文がみられる。暗文は中央から発し、口縁端部から1cm前後の位置まで施されている。

大型碌(第3図2)

大型の碌で、頸部径5.6cm 体部径15.1cm 器高19.7cm前後を測る。口縁部は一部が残存している。肩部はやや張り、底部は尖り気味の丸底である。色調は黒色で、焼成は極めて良い。頸部の半分から肩部にかけての右半分に自然釉がみられる。

碌(第3図3)

頸部の下部4分の3が残存している。体部径10.2cm 頸部径4.4cm前後を測る。肩部はゆるやかに下がり、2本の沈線がみられる。頸部には3本の沈線が施され、沈線の上には細い線が施される。また肩部の沈線の下にも細い線が見られる。色調は灰白色で、焼成は良好である。

脚付短頸壺(第3図4)

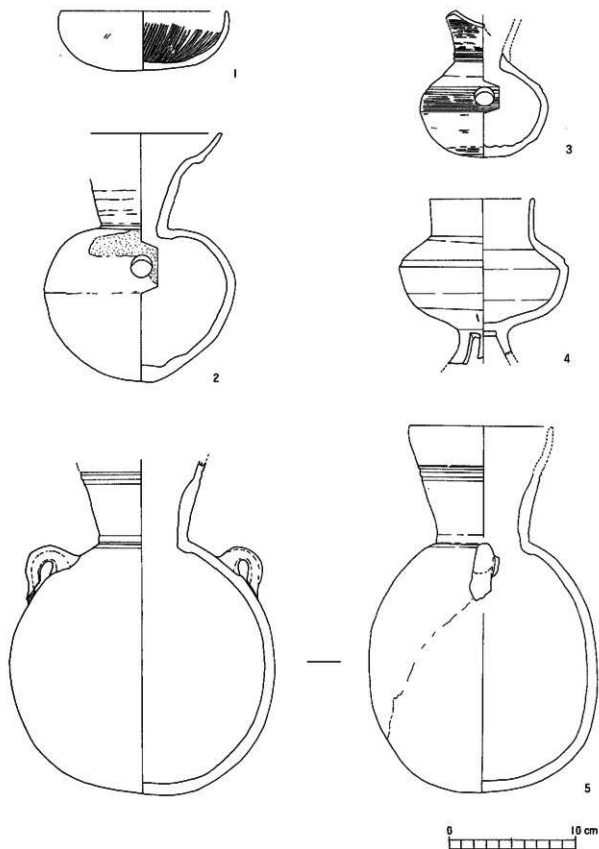
脚部の2分の1が破損しているが、すかしがみられる。口径8.2cm 体部径13.4cm前後を測る。頸部から口縁部にかけて僅かに外反する。肩部には1本の沈線が施される。色調は灰黒色で、焼成は良好である。

提瓶(第3図5)

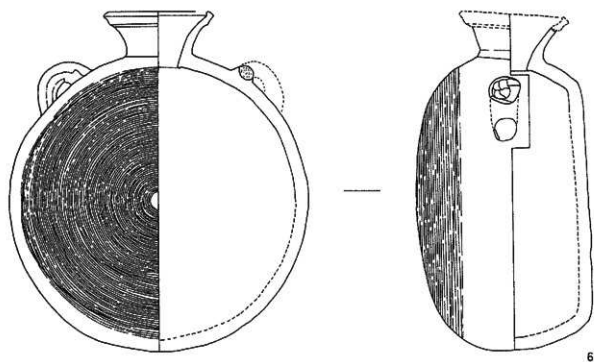
口縁部の6分の5が破損している。体部径20.8cm 口頸基部径7.1cm前後を測る。頸部には2本の沈線がみられ、肩部の輪状の取っ手がある。色調は淡灰色で、焼成は固い焼きである。胎土に小礫がみられ、それを中心に亀裂がみられる。

提瓶(第4図6)

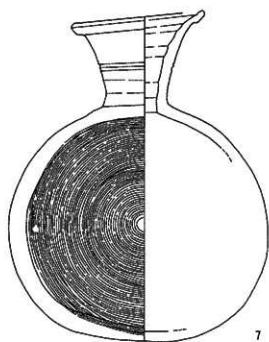
口縁部の2分の1が破損している。体部径23.3cm 口頸基部径5.2cm 器高26.7cm前後を測る。口縁部の内側が上方に引き出され、肩部に輪状の取っ手があり、体部の一面には×の窯印がみられる。他の



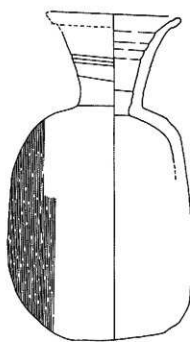
第3図 片瀬山古墳群出土土器実測図(1)



6

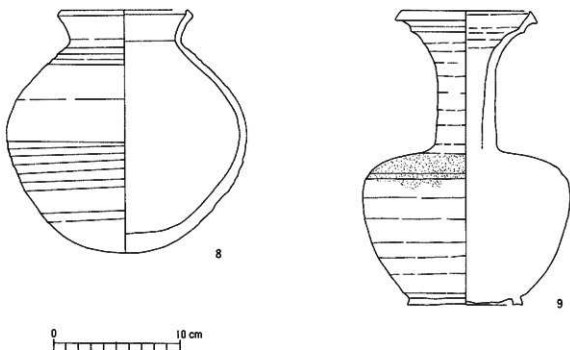


7



0 10 cm

第4図 片瀬山古墳群出土土器実測図(2)



第5図 片瀬山古墳群出土土器実測図(5)

一面には同心円上の文様が施されている。

提瓶(第4図7)

口縁部の一部が破損している。体部径20.3cm 口頸基部径5.2cm 器高23.9cm前後を測る。

一面の体部の肩と底部と体部の堺には2段の面取りが施されている。他の一面には同心円上の文様が施されている。一方の肩部には×の窯印がみられる。

広口壺(第5図8)

完形の広口壺である。体部径19cm 口頸基部径8.8cm 器高19.1cm前後を測る。口縁部内面は上方に引き出され、肩部はなだらかに下り最大径が体部の中心にくる。肩部と体部の下方にはノタメ痕がみられる。

長頸壺(第5図9)

完形の長頸壺である。後円部径11.2cm 体部頸16.3cm 器高23cm前後を測る。底部には高台が付き、肩部にはやや張りがある。肩部と体部の堺には1本の沈線が施され、肩部には自然釉がみられる。

4. まとめ

有東坂の誓願寺裏山の片瀬山一帯は『清水市埋蔵文化財包蔵地台帳』(1997清水市教育委員会)にも遺跡の存在は記載されておらず、遺跡形成には好適な条件を備えた地域といわれながら、これまで調査の手が加えられていなかった。

丘陵裾部の平坦地は近年急激な宅地化が進行し、特に西裾の馬走地区では斜面を削り宅地造成が進められていたことは埋蔵文化財関係者も承知しており、不定期的に巡視していたが古墳発見当時の段階で調査ができなかったことは遺憾であった。

今回の遺跡調査で確認できた出土土器は9個であるが、当時工事に携わった人が持ち去ったものも他にあったという。

出土土器は3地点、時期的には概ね4期に分類される。平成9年出土した片瀬山1号墳の土器は、5世紀末～6世紀初頭と6世紀後半の2時期に分類され、石室の状態がまったく不明であるので判断できないが追葬の可能性も考えられる。平成4年、馬走地点（2号墳）から出土した土器は7世紀前半、昭和62年今泉地点（3号墳）からの出土土器は7世紀末と位置づけて大過ないものと推察される。2号墳、3号墳の古墳としての認定については判定資料が乏しいが、土器の欠損が少ないこと、立地条件、出土地点周辺からは遺物が全く発見されていない点などから判断して古墳として認定することにした。

3基の古墳の地区名は馬走北（旧地籍・馬走字片走山302）、馬走（旧・馬走字九重445-1）、今泉（旧・今泉字瓦ヶ谷81-1）と異なるが、この付近は境界線が交錯した地域であり、特に2号墳と3号墳は同一地点と考えてもよいほど接近している。土器が出土した時点で一報があれば残念に思うが、今回の調査により有度山東北麓において新たに古墳群の存在を確認できたことは大きな収穫であった。片瀬山稜線上には前述したように2地点において瘤状の小尾根が存在し、外見上古墳の可能性も推察される。片瀬山は比高25m前後の低丘陵であり掘部は全域が宅地として開発されている。聞くとところによると、すでに山上まで宅地造成する計画があり、現在の経済不況で一時中断されているといわれている。関係者として今後十分な注意が必要とされる地域である。

後田遺跡発掘調査報告書

1. 調査に至る経緯

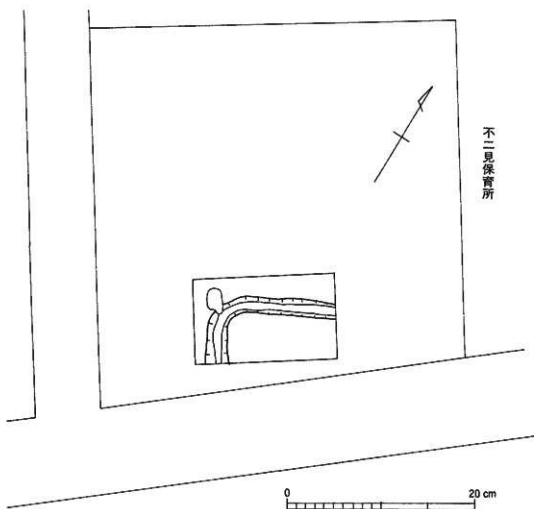
後田遺跡は市営日立第一アパート付近で発見された古墳時代から平安時代の遺跡である。その後、平成2年9月25日には日立町766-12外でテニスコート建設により確認調査を実施した。この結果、土錘が出土したが、遺物包含層は検出されなかった。土錘については戦前の水田耕作土に流入したものであった。今回の調査地点は市営日立第一アパートから南西に100m前後の位置にある清水市日立町4-19である。この地点は以前水田であり、戦後母子寮ふじみホームとして使用されてきた所である。母子寮解体後は不二見保育園の駐車場として使用されていたが、最近この場所に新たに保育園が建設されることになった。これに先だって確認調査を実施したところ、溝の一部が検出され、土師器片・須恵器片が出土した。このため今回、溝部分の発掘調査を実施した。

2. 環 境

清水市は日本列島のほぼ中央部に位置し、市街地の北側は南アルプスから連なる庵原山地があり、南側には庵原山地から清水平野をへだてて有度丘陵がある。有度丘陵は標高307mで第4紀洪積世になってドーム状隆起によって形成されたとされている。この丘陵は南側を久能山といい、北側を名勝日本平と称している。有度丘陵の基本的な土層は、下層から根古屋泥層、久能山礫層、草薙泥層、小鹿・日本平



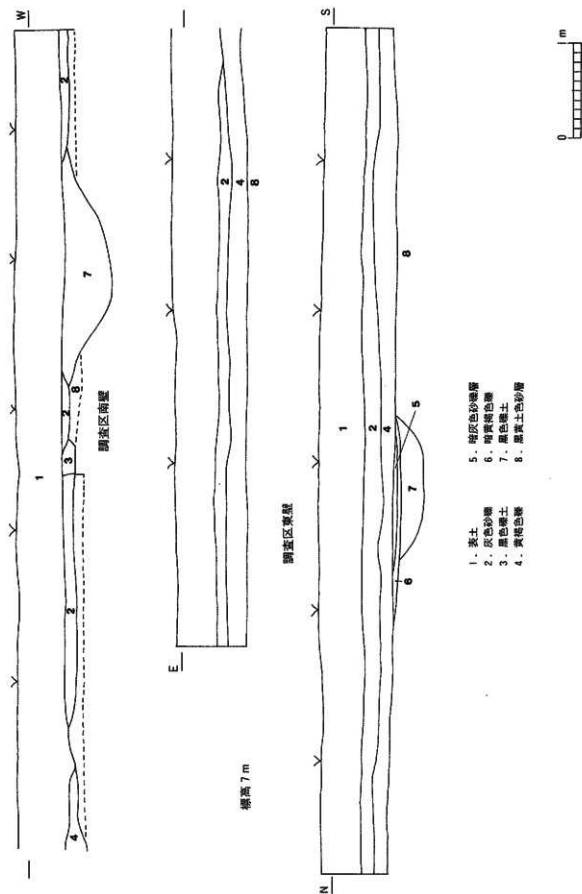
第1図 後田遺跡位置図



第2図 後田遺跡調査区配置図

礫層、国吉田礫層からなり、これらがたまねぎ状に重なっている。丘陵北側は比較的緩やかな斜面となり清水平野へと続く、南側と東側は駿河湾の荒波によって削られたため急峻な海食崖となっている。有度丘陵東側も複雑な谷地形となっており、丘陵裾には鉄舟寺、龍華寺などの寺院が造られている。本遺跡は有度丘陵を降りた鉄舟寺から350m前後北東の砂層上に位置する。

周辺の遺跡としては、本遺跡から西に約500m前後の有度丘陵の中腹には杉原山古墳群がある。南西200m前後には弥生時代の石鍬、軽石、木製品の出土する妙音寺遺跡がある。北側800m前後には古墳時代の土器の散布する北矢部二丁目遺跡がある。また南側700m前後には天神山古墳群がある。本遺跡はこのように現在確認されている遺跡からはやや離れた場所に位置する。



第3図 後田遺跡土層図

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

確認調査では溝が南側から北側に曲がる部分を検出した。このため調査は溝の存在と思われる範囲で、新築建物の下になる部分について調査を行うことになった。調査区は確認調査で出土した溝部分の流路の方向に添って南北9m、東西15.2mを設定した。したがって調査面積は136.8m²となった。

(2) 調査の経過

確認調査は平成13年7月5日に実施した。この確認調査により南側から東側へ大きく蛇行する溝を確認した。溝内からは土師器片・須恵器片・灰釉陶器片が出土し、近世・近代の遺物は見られなかったため調査を実施することになった。調査は平成13年10月11日から平成13年10月24日までの7日間を費やして実施した。

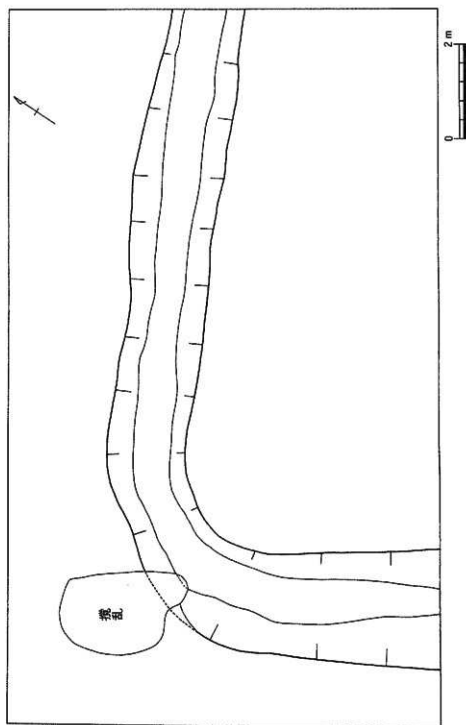
平成13年10月11日	器材の搬入を行い、調査区を設定し調査を開始する。
10月12日	溝の南側から北側に延びる部分の調査を行う。溝内からは灰釉陶器片が出土する。
10月16日	溝床面から灰釉陶器片の段皿が出土する。
10月22日	写真撮影終了後に遺構平面図・断面図の作成を行う。
10月24日	調査区の埋め戻し後、器材の搬出を行い調査を終了する。

(3) 層位の観察

本遺跡での基本的な層位は8層である。第1層は表土層で、厚さ49cm前後を測る。最近の水田耕作土の上に埋め土が行われたものである。第2層は灰色砂礫層で、厚さ21cm前後を測る。溝が廃絶してから堆積したもので、調査区全体に見られ、東側に厚く堆積している。第3層は黒色礫土のブロックで、厚さ14cm前後を測る。第4層は黄褐色礫で、厚さ24cm前後を測る。調査区東側にのみ堆積している。第5層は暗灰色砂礫層で、厚さ5cm前後を測り、東側の溝の覆土と思われる。第6層は暗褐色礫で、厚さ4cm前後を測り、東側の溝の覆土と思われる。第7層は黒色礫土で、厚さ49cm前後を測り、溝の覆土である。第8層は暗黄土色砂層で、遺構のベースとなるものである。

4. 遺 構

遺構としては溝が検出された。溝幅は現状で2.55m、深さは現状で49cm前後を測る。溝の平面形は調査区南壁の西側よりから5m前後北上し、大きく東側に向かって90°に蛇行し、そこから直線的に11m前後で調査区東壁に達する。横断面は上側が広いU字形である。溝本来の落ち込みの肩はさらに上層にあったと思われるが、何らかの原因により削られてしまったものと思われる。南壁での溝の標高は6.15m。東壁での溝の標高は6.03mと南から東に向かって13cmの比高差があり、南側から東に向かって流れていたものと思われる。この溝が90°に蛇行すること、東側に直線的に延びること、灰釉陶器片が多く出土することから自然の流路とは考えにくい。



第4図 後田遺跡遺構全体図

5. 遺 物

(1) 土器

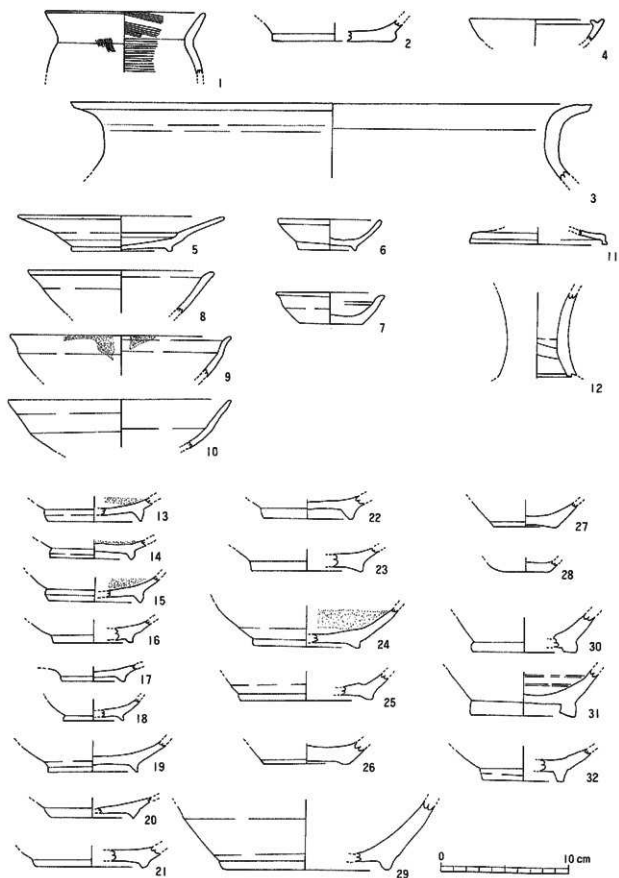
主な出土遺物としては土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、山茶碗片、石製品が出土した。このうち最も多いのは灰釉陶器片、山茶碗片である。

1～4は土師器片と須恵器片で、1、2、4は外部から流入したものである。1は土師器の小形の甕形土師器の口縁部で、推定口径12.7cmを測り、外面の頸部から肩部にかけて斜めのハケ整形がみられる。内面の口縁部には斜めのハケ整形が施され、肩部には荒い横のハケ整形がみられる。2は土師器の甕形土師器か壺形土師器の底部片で、推定底径9.6cm前後を測り、底部には木葉痕がみられる。3は土師器の大形の甕形土師器の口縁部で、推定口径41.2cm前後を測り、口縁端部を斜めに引き出し、頸部にはへら状工具による沈線がみられる。4は須恵器の坏身の口縁部で、推定口径10.6cm前後を測る。

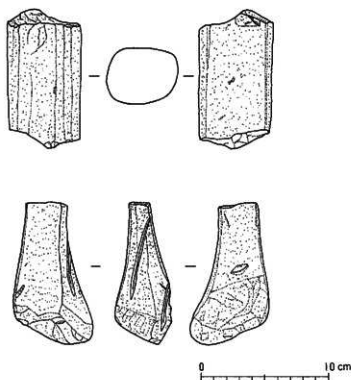
5は灰釉陶器の段皿で、溝床面近くから出土した。推定口径16.2cm、器高2.9cm、推定高台径8cm前後を測り、高台は角高台でわずかに外に開く。6・7は小皿で、6は高台のあるもので口径8.2cm、器高2.4cm、高台径4.4cm前後を測る。高台は三角高台で付け方が雑であり、胎土は細かい。溝内南側の床付近から出土したものである。7は高台のないもので推定口径8.6cm、器高2.4cm、推定底径4.8cm前後を測る。口縁部は外に引き出され、内面には重ね焼きの痕跡が見られる。白色を呈し、胎土はかなり荒い。

8～10は灰釉陶器・山茶碗の口縁部である。8は山茶碗の破片で推定口径14.6cm前後を測り、口縁端部が丸みを帯び僅かに外に引き出される。9は推定口径17.5cm前後を測り、口縁端部は外に引き出される。態度は荒く釉はつがけである。10は推定口径17.4cm前後を測り、口縁部は上方に引き出され、胴部には稜がみられる。11は蓋の一部で推定口径10.8cm前後を測り、12は長頸壺の頸部破片である。

13～29は灰釉陶器・山茶碗の碗口皿の底部片である。13は推定高台径7.6cm前後を測り、高台は外面に稜を作り出さず、下半が内湾しつつ下端が尖る。底部は糸切り後へら削りが施され、高台部分にはミスの痕跡がある。14は推定高台径6cm前後を測り、高台は内側下半の内湾や外側下方の稜が弱い三日月高台である。底部は全体にへら整形の痕跡があり、内面には緑色の釉がハケ塗りされた痕跡がみられる。溝の周辺から出土したものである。15は推定高台径7.1cm前後を測り、高台が三日月高台であるが高さが低く幅が広い。内面には緑色の釉が施されている。16は推定高台径6.2cm前後を測り、底部はかなり厚い。高台はかなり小さく台形状で一部で三角高台となる。高台は底部の際に取り付けられている。17は推定高台径5cm前後を測り、高台にはミスの跡がみられる。底部は回転糸切り後にナデ整形が行われている。18は小皿で推定高台径4.8cm前後を測り、高台は細い三角高台で端部は外に引き出される。胎土には小石を含む。19は推定高台径7cm前後を測り、高台は三角高台となる。体部はわずかに丸みを持って立ち上がり、内面には重ね焼きの痕跡がある。20は推定高台径6.5cm前後を測り、高台は三角高台である。底部には糸切り痕が残り、胎土は細かい。溝内南側の床付近から出土したものである。21は推定高台径8.6cm前後を測り、高台は台形で低い。胎土はやや荒く、底部は厚い。22は推定高台径6.8cm前後を測り、高台は三角高台で、高台の内側の付けかたは雑である。高台外面にはナデが施される。23は推定高台径8.7cm前後を測り、胎土は白色でかなり荒い。24は推定高台径8.4cm前後を測り、胴部は丸みを持つ。胎土はかなり荒く、内面に重ね焼きの痕跡がある。25は推定高台径10.3cm前後を測り、高台内側はナデが施される。胎土は白色で荒く、内面には重ね焼きのためか沈線がみられる。26は推定高台径7cm前後を測り、高台は平らで一部にモミ痕がみられる。底部はかなり厚く、胎土は荒い。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。27・28は高台のないもので、27は推定底径4.9cm前後を測り、底部中央が高くなる。底部は糸切り後荒いナデ整形が施されている。28は小皿の破片で推定底径3.8cm前後を測る。胎土はかなり荒い。29



第5図 後田遺跡土器実測図



第6図 後田遺跡出土石製品実測図

は推定高台径13.2cm前後を測る。胎土が荒く、内面には釉の痕跡がみられる。30は推定高台径8.3cm前後を測り、胎土は灰色でかなり荒い。31は推定高台径8.2cm前後を測り、底部は回転糸切り後にナデ整形が施されている。

32は白磁で、推定底径6.3cm前後である。高台は台形でかなり高く、底部と高台の間に段がみられる。

(2) 石製品

石製品は2点が確認できた。1は形状は柱状で上下を破損しているが、断面はほぼ楕円形である。長さ11cm、断面最大幅5.6cm、幅4.4cm前後を測る。一面

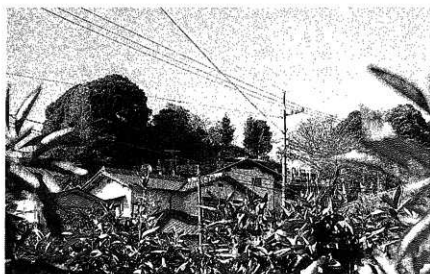
はほぼ平らに面が取られ、外は細長く面取りがなされている。材質は中粒砂岩である。

2は砥石で最大寸11.2cm、最大幅6.4cm前後を測る。形状は肋骨の一端の様であり、両端部は破損している。断面形は四角形で上部に比べて下部が太い。一面には先の尖ったものを砥いた痕跡がみられる。

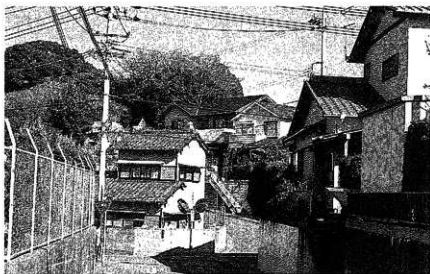
6. まとめ

溝について出土遺物からみると古墳時代の土師器片・須恵器片は3点であり、他の多くの出土遺物は灰釉陶器片、山茶碗片であることや3点が溝覆土の上方から出土していることからこれらは周辺から流入したものと思われる。これらのことから溝は古墳時代からの流路とは考えられない。溝の時期を考える遺物としては9世紀前半と思われる段皿が溝床面から出土しており、この時期から13世紀前半までの遺物が多量に出土している。したがって溝は9世紀前半から13世紀前半まで存在した可能性が考えられる。溝の性格については、南側から大きく90°蛇行して東へ直線的に延びることや9世紀前半から13世紀前半までの遺物が存在することから地方の有力者の館跡の区画溝の可能性も考えられる。今後この溝の性格を確定するためにも南側や東側など周辺の調査が必要となるものと思われる。

図版第1 片瀬山古墳



1. 片瀬山遠景

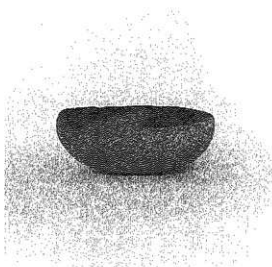


2. 片瀬山1号墳

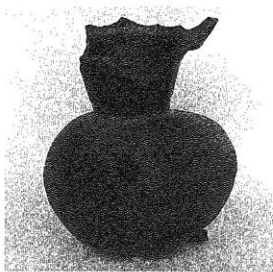


3. 片瀬山2号墳

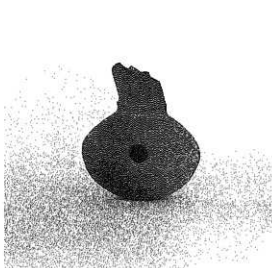
図版第2 片瀬山古墳群



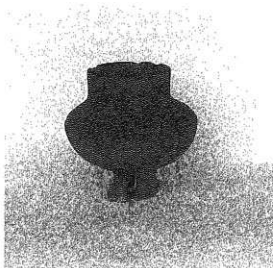
1. 1号墳出土土師器杯



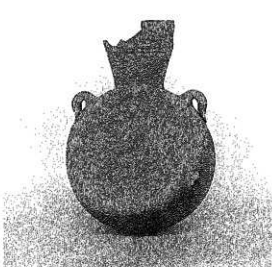
2. 1号墳出土大型罐



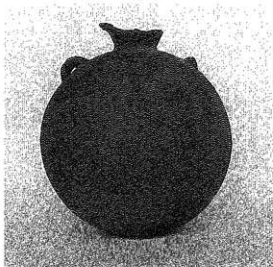
3. 1号墳出土罐



4. 1号墳出土脚附短頸壺



5. 1号墳出土提瓶

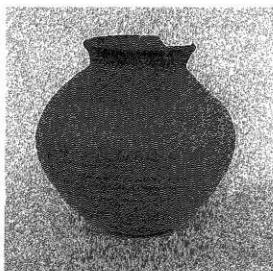


6. 1号墳出土提瓶

図版第3 片瀬山古墳群



1. 2号墳出土提瓶

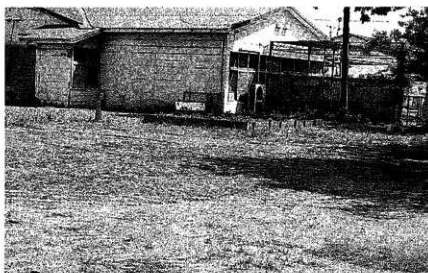


2. 2号墳出土広口壺



3. 3号墳出土長頸壺

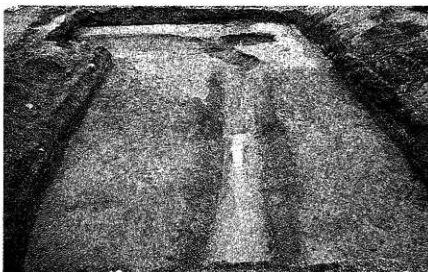
図版第 4 後田遺跡



1. 調査区近景



2. 溝発掘状態（西から）



3. 溝発掘状態（東から）

図版第5 後田遺跡



1. 段皿 (表)



2. 段皿 (裏)



3. 石製品



4. 砥石

報告書抄録

ふりがな	かたせやまこふんぐんちょうさほうこくしょ				
書名	片瀬山古墳群調査報告書				
編著者名	杉山 満 大川敬夫				
編集機関	清水市教育委員会				
所在地	〒424-8701 静岡県清水市旭町6番8号				
発行年月日	2003年1月31日				
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
カタクヤマコフンダン 片瀬山古墳群	シミズシ 清水市 1号墳 マハルキア 馬走北3-37 2号墳 マハルキ 馬走1-445-4 3号墳 イモリス 今泉58-2	22204	市番号 県番号 清水市	35° 6' 30"	138° 7' 50"
調査期間	調査面積	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
			片瀬山古墳群	宅地	古墳時代
主な遺構		主な遺物		特記事項	
なし		須恵器		昭和62年、平成4年、平成9年の宅地造成により遺物出土 平成14年の事後調査により報告書作成	

報告書抄録

ふりがな	うしろだいせきはつくつちょうさほうこくしょ				
書名	後田遺跡発掘調査報告書				
編著者名	大川敬夫				
編集機関	清水市教育委員会				
所在地	〒424-8701 静岡県清水市旭町6番8号				
発行年月日	2003年1月31日				
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ウシロダイセキ 後田遺跡	シモヅレ 清水市 日立町 4-19	22204	市番号 196 県番号 清水市 170	34° 57' 27"	138° 29' 19"
調査期間	調査面積	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
20011011 20011024	136.8 m ²	保育園建設	後田遺跡	駐車場	平安時代
主な遺構		主な遺物		特記事項	
溝		灰釉陶器		なし	

片瀬山古墳群調査報告書 後田遺跡発掘調査報告書

発行日 平成15年(2003年)1月

編集・発行 静岡県清水市教育委員会
〒424-8701
清水市旭町6番8号
TEL 0543-54-1111代

印刷 ㈲ 中 村 印 刷

